

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第211号（2025年10月秋号）

常世の風に吹かれて呟いて（17） 白井啓治

（故白井啓治氏の9年前（2016年）の記事から

一部を抜粋して連載します。）

・一日暮らせばそこはふる里（2016・10・1）

この地に来てまもなくの頃に呟いた一行である。この地に越して来たのは1999年の2月であった。2、3年の腰掛のつもりが、もう17年になつてしまった。だが、この地は吾がふる里、という感覚は未だに湧いてこない。

まだこの地をふる里と思う、としていた2004年の事。まちおこし運動の一つとして、ふる里にある民話をルネサンスしようという講座の講師を引き受けた。この講座は実質2年持たなかったが、第一期生、二期生の三人と一緒に「ふるさと風」という月刊紙を発行しようと立ち上げた。

その会報も今年で10年を迎えた。会員は現在9名であるが、全員休むことなく毎月原稿を書いている。創刊の時から的小生含めて四名は、この10月号で125カ月連続投稿となる。

そのふるさと風の会が、今日石岡市民の日に表彰を受けた。小生個人の表彰であれば、受ける気はないのでご辞退するのであるが、会員の励みになるだろうからと表彰式に出かけてきた。表彰式に対する感想は何もないが、風の会の今月で125号は自慢して良いだろうと思っている。

・晴れても秋晴れはなく夏のこぼれ晴れ

久しぶりに雨がなまいと思つたら、夏の暑さが戻つて来た不愉快な晴れ陽気。昼前にはもう冷房がないと我慢ならない暑さとなった。

庭の蜥蜴達は元気に走り回っている。

本当ならば冬の準備に忙しい筈のだが、秋がないのでまごついてるのだろう。

暑くて不快な陽気ではあるが、月初の編集作業があり、庭の蜥蜴と遊んでいる時間はない。一日机に座り、PCとにらめっこである。



（絵：兼平智恵子）

今月は、嬉しい原稿が突然飛び込んできたのは良いのだが、古語の文章なので非常に打ちにくい。古代地名に関する原稿なので、地名の文字が当て字が多く、語源は縄文語、アイヌ語だったりするので超がつく大変さ。現代文のようにサツといかない。これがなかなかのストレス。しかも、内容を楽しみながらの打ち込みなのでなかなか進まない。すっかり肩が凝ってしまった。

・季節は秋晴れを置き忘れ雨だけを連れてきた
今朝は、見事な朝焼けに色が染められたが、9

時頃から本格的に降り出した。昼過ぎは、雨は止んだが湿度は相変わらず高い。

今週は毎朝4時には起こされ、お犬様の散歩に出かけることになった。夜布団に入るのが一時くらいだから、寝たと思ったら直ぐ起こされる感覚で、流石に今日は眠い。ワン・ニャンの3sは、散歩、食事、ブラッシングの時以外はずっと寝ている。雨が降っていたり、庭の草達が雨に濡れている時は、三人とも外に出たがらない。

野良として育った3sは、雨の時は出歩こうとしない。出歩いて雨に濡れると乾かすのが大変なことを良く知っている。（2016年10月9日）

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、1・4・7・10月初めに会報作りを兼ねた懇親会と各月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額1,500円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659 木村進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0018 石岡市若松 1-5-38（木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

むらさき花だいこん

兼平智恵子

早春の頃に、石岡第一高等学校の正門から常磐線の踏切に向かうとやさしく愛らしい、うすむらさきの菜の花が迎えてくれます。

そのうすむらさきの菜の花は日中戦争の終結と永遠平和を念じていた一軍人、山口誠太郎さんと江蘇省の紫金山麓にあった戦災廃墟で出会いました。

その花は「花だいこん」、正式名称は「オオアラセイトウ」と言う紫色の小さな花を咲かせる植物でした。誠太郎さんはこの草花に思いを託し、種子を日本へ持ち帰り、この花の名を紫金草と名づけました。

翌年の春には誠太郎さんの自宅庭、一面に紫金草の花がたくさん咲き揃って、いとおしさを感ぜさせるようになりました。周囲の知人にも分け広げ、南北を縦断する鈍行列車に乗って車窓から紫金草の種を撒いていました。

このように繰り返し繰り返し、何年も何年も：

やがて日本の鉄道沿線一帯に、この美しい小さな紫の花がたくさん咲くようになりました。

戦後も継続していた花だいこんの栽培・普及が全国に広がるのは昭和四十一年のことでした。花だいこんの種子配布を伝える投書が新聞に掲載されると全国から六千通もの反響の手紙が寄せられ、こうして全国へ広がった花だいこんの栽培は山口誠太郎さん没後も遺族の方々と協力者に受け継がれていきました。

このような中、さらに飛躍を見せ世界に広がったのが昭和六十年の科学万博つくば、85の

会場で、平和の象徴として「花だいこんの地球花一杯運動」が計画され、「平和の花だいこんを広める会」が結成されました。

万博会場で配布するには大量の種子が必要で、その栽培には市内外の協力者の他、旧石岡市域の小・中・高校生も参加し、目標とした種、二〇〇〇を大きく超える五〇〇〇も集まり、これらの種は万博会場を中心に一〇三万部配布され平和の使者として世界へ広がりました。

一九六六年山口誠太郎さんはこの世を去りました。

息子である山口裕さんはこの種子を全国に広める任務を受け継ぎ、日本中ますます大勢の人達が紫金草普及の列に加わるようになりました。

この時代、山口裕さんは医学博士として日本で広くその名を知られており、紫金草を紹介する為、裕さんは常に世界各地の学術会議に出席する際、わざわざ制作した英文版のパンフレットに種子を添えて友人に送ったりしていました。

花の季節に 一面に慈愛の花。

そよ風に 花がそよぐ。

花の種子は 遠い海の彼方から。

期待を抱き ここに根つき花咲く。

平和の花 紫金草よ

一九九八年、合唱組曲「紫金草物語」が世に出ました。各地の民間合唱団が競うように歌い伝えるようになりました。

今年、2025・6・25 日本紫金草合唱団演奏会が行われ、「花をそだてるように 平和

もそだてるもの」の言葉と共に紫金草の種が配られました。



現在も国と国の戦いが続いている。

人の命を第一に大切にしている国になつてほしいです。

紫金草（花だいこん）は毎年二月末の頃から約二ヶ月咲き続けると言われています。

参考資料 石岡市ふるさと歴史館

第四十一回企画展「昭和百年」

紫金草に願いを込めて

日中平和友好の記録

〇愛らしく花だいこん上品に紫金草と呼んでみる

智恵子

我が人生の回想 21

木下明男

昭和100年……。そして今は4月、諸々のメディアニュースでは新しく社会に参入する青少年が取沙汰されている。私自身も社会に参入したのは60余年まえ……。？思えば、随分と長く生きてきたものです。戦後からの疲弊生活、朝鮮戦争による軍需景気、安保闘争、労働争議、学生闘争、労働組合の再編、そして急成長経済、バブル景気……。それらの影響（土地バブル）で「労音」にも余りある資産が生じた。法人登録のない任意団体「労音」は、その財産確保のためI会長とS税理士が画策し、資産を確保する事が出来た。都内の地域拠点に6ヶ所の会館建設、そして茨城にギター文化館の建設。大切なのは、これ等生じた資産財産を守ることではなく、決して個人のものではないので、どう皆に返していくか？労音であれば、会員の利益に返却していくかです。若い先短い筈の私は、未だに私的なとらわれ方しかできていない……。大変恥ずかしい。ともすれば、永い間活動してきた行為（自らの生き方の筈）に對して、どうしても報い（評価）を求めてしまう。

1990年以降、永い文化運動とそれ以降の活動の中で経験した3つの裏切り！（悔い……）

① 最初は、前回号で紹介したギター文化館建設と財団創立に関して、I会長とS税理士の功績抹殺と組織からの排除。私も労音の委員長、財団の会長を辞職……。同時期に、40年近く務めた会社（Nikon）も退職し地域労音の事務局員として働くようになる。（55歳だった）それから6年、東京

と松戸で地域労音の事務局員として働き、2002年からギター館の代表として石岡市の地域活動と共に働く。オーナーの労音本部から70を過ぎた時期から退職を迫られ、75歳でギター館を辞職する。

② ギター館の退職に当たっては、本部組織とギター館の運営者から、濡れ衣を負わされ（横領の疑い）を掛けられ即日追い出された。挙句の果て労音の代表者からは、裁判に掛けるなど存在を言い出す始末……。全くのリスpektさえナシ、50年も働き、生涯を掛けたものに対する扱いとは到底思えぬものだった。

③ 過去2件に匹敵するのが、今回の事務局長退職の件です。言い分は色々あると思うが、思い通りにいかないからと、同じエリアで同じ職に就くとは信じがたい。

これ等の評価は、自らがどう感じたかであって、大切なのは残された組織や団体が、本来の目的に對して、社会からどう評価されているかです。実際には、労音と言う鑑賞団体もギター館と言う建物も、其々の社会の中で存続し、また大きな役割を果たしています。嘗てその一翼を担い、今の礎を築いたと言う、自己評価（自己満足でもいいか）できる人間でありたいと思うのですが？



地域に眠る埋もれた歴史（99）

木村 進

【まほらの里】（7） 古代に夢をはせて

・小原神社

笠間市（旧友部町）小原にある「小原神社」を訪ねました。



茨城の県名発祥の地。

なんて石岡の人が言うのもおかしいけど、やはりこちらが最初の茨城郡のはず。

茨城の県の魅力度連続最下位というので、どこが発祥の初めかななどどうでもよいけど……。ちゃんと調べればわかるはず。



樹齢700年くらいの樺の木がごろごろある。
このコブは貫録がある。

・(牛伏) 舟塚古墳

有賀神社周辺の昔書いた記事を見直している。
このあたりの古代に夢をはせていたら何かが出てきそうだからである。

この大足(おおだら) 地帯はダイダラボッチが住んでいたという伝説が残る。

大串貝塚はダイダラボッチが食べた貝が山となつたと常陸風土記に書かれているのでこのダイダラボッチは大きな足だから「大足」に住んでいたという単純発想だが、当然大足(おおだら) はそんな意味ではないだろう。

ではどんなことが考えられるのだろうか？

ここにある「舟塚古墳」は数年前に書いたがここでもう一度振り返ってみたい。

古墳の全長は約75 mで6世紀頃のものと見られています。
石岡の舟塚山古墳(全長:186 m)、玉里の舟塚山古墳(全長:84 m)よりは小さいがかなりの規模だ。



・くれふしの里古墳公園

水戸の牛伏地区まわりをみながら気が付いたところをめぐっています。

公園内は落ち葉を燃やしていたため煙が漂っていました。そこに日差しが・・・ちよつと幻想的でした。古墳からはたくさんの埴輪なども出土しています。

この大きな前方後円墳は牛伏4号墳で、全長が72 mです。6世紀後半の築造と推定されています。



味気のない4号墳などと古墳に名前がつけられているが、このあたりにいた豪族がかなりいたことを物語っている。

この古墳公園内には16基の古墳が点在している。古墳も円墳が9基含まれる。築造年代は4世紀末から6世紀末の約200年間と考えられている。これは何を物語っているのだろうか？

いったいどんな人たちが生活していたのか？

公園内は落ち葉を燃やす煙が立ち込め、太陽の光も幻想的な模様を描いていました。

・手子后神社(ていさきじんじや)

昨日書いた「くれふし古墳公園」に曲がる道を反対方向の東側に曲がってそのまま平地の道を進んで少し登り坂になった辺りの右側に手子后神社があります。(水戸市田島町)

さて、何故のこの神社を「古代に夢をはせて」に

載せておきたくなったのかというと、何かこの神社を知るヒントになるのではないかと考えたのです。手子后（てごさき）神社については前に記事にしています。

基本的には神栖市波崎の銚子大橋の入り口にある「手子后神社」がメインになる神社ですが、茨城県井次の5カ所があります。

- ・神栖市波崎
- ・石岡市中津川
- ・水戸市元石川町
- ・水戸市田島町
- ・城里町上坪

であり、すべて近くに古墳があります。

常陸国風土記に「童子女（うない）の松原」として出てくる話に登場する話して

「那賀の寒田のいらつこ、海上の安是のいらつめといふ、年若くして神に仕へてゐた少年と少女が、歌垣「耀歌（かがい）」の集ひで二人は偶然出会い、人目を避けて歌垣の庭から離れ、松の木の下で、手を合はせて膝を並らべ語り謳っている、時のたつのを忘れ、気が付くと日がさしてきていた。二人は恥ずかしくなつてその場で松に姿が変わってしまった。いらつこの松を奈美松、いらつめの松を古津松といふ。」

この手子后神社はこの二人「奈美松命と古津松命」を祀るのが基本なのですが、それぞれ少しづつ違ってきます。

これを紐解いていくと鹿島郡「香島郡（かしまのこおり）」が誕生した話に行きつくようです。

香島（鹿島）郡は大化5年（649年）に下海上国より「軽野」という土地と仲（那賀）国より「寒田（さむた）」といわれる土地をそれぞれ供出して

新しい郡（こおり）が置かれたとなっています。では最初に書いた神栖市波崎の手子后神社には、この神社は神護景雲年間（西暦767年）の創建で、祭神は手子比売命（てごひめのみこと）。鹿島史によると神遊社ともいい、御祭神は、大神の御女なりとある。又一説には「常陸風土記」の「童子女の松原」に見られる安是の嬢子を祀った社とも言われている。」と書かれています。

大神は鹿島の大神のことです。

こちらのくれふし古墳の里公園に近い手子后神社を見てみましょう。



祭神は手名稚命（てなづちのみこと）で、この神はヤマタノオロシ退治でくる足名稚命（あしなづちのみこと）とこの手名稚命夫婦の娘がクシナダヒメのことです。

奈美松、古津松を祀ってはいません。

またこの神社だけが「宿魂石」を祀っているともいわれています。

宿魂石は大甕（おおみか）神社にあります。この常陸の国に進出してきた建借間命（たけかしま）（那賀の初代国造になった）が退治できない強敵の「星神香香背男（ほしのかがせお）」を退治するために派遣された「建葉槌命」により大甕山でこの宿魂石で抑え込まれているということになります。

この建葉槌命は常陸国二宮である「静神社」に祀られています。

どうですか何か感じませんか？

・鹿の子から五万堀官道

石岡の鹿の子遺跡は常磐高速道路の工事の時に掘り返して発掘され、多くの住居跡や漆紙文書などが見つかり、地下の正倉院と呼ばれたりしています。

しかし、ここは蝦夷征伐のための武器供給の拠点でした。

見つかった文書などから奈良時代半ばから平安時代初期頃（西暦750年頃から900年頃）にここから東北に向けて多くの人も武器も送り出されたものと考えられます。

このため、現在の高速道路に沿うように広い官道（両端に溝を持つ）が真っ直ぐに水戸の台渡里（延喜式駅家では河内駅）まで続いていた。

この官道はその後廃れ、土で埋まり、一部は鎌倉時代にまた作られたりしたようです。



見つかった五万堀官道の発掘場所。

この場所は石岡からは石塚街道(県道22号線)で涸沼川を「仁古田」の橋を渡り、その先の十字路の信号を左折すると、常磐高速の友部サービスエリア(スマートインター併設)に出るが、この信号から南西方向に斜めに細い道が続いている。道路の両側には側溝が掘られ、側溝中心間の幅で6〜11mで、7世紀後半のものから10世紀にわたって数種類の道路跡が見られた。幅の広い程時代が古いという。

鹿の子遺跡で見つかっている文書などから、武器工場はもともと古くできていたようなので、この官道は少し後に、いろいろな用途で作られたものなのだろう。

延喜式(927年完成)に書かれている駅家(うまや)の名前は、この先も東山道につながるように続いているので、かなりの人力を使って道を掘ったと思われる。

今もたぶんこの官道が通ったであろう場所を掘れば官道跡が見つかるのではないかと思います。

・景行天皇は東国に來たのか？

常陸国風土記を紐解いていると景行天皇が東国にやってきた事が数カ所に書かれている。

景行天皇は第12代天皇で、ヤマトタケルの父と言った方がわかりやすい。

しかし実在したのかどうかも分からない。

日本書紀によれば西暦71年から西暦130年の60年間に在位したことになり、生まれたのは紀元前13年であるので、143歳まで生きたことになる。

また古事記には子供の数も80人いたとされ、奥さんの数も30人以上です。

また身の丈も一丈二寸(約2m)位の大男と書かれている。

各地の風土記などの記録や日本書紀によれば、景行天皇は息子のヤマトタケル(日本武尊)を東国に派遣し、自らは九州に遠征してその熊襲(くまそ)や土蜘蛛を征伐したとされる。

しかし、この時代はというと卑弥呼のいた邪馬台国の後である。

中国三国志(魏志倭人伝)が書かれたのは3世紀末頃であり、邪馬台国は西暦238年から247年頃の出来事だ。

では実際に景行天皇が実在したとするといつごろの時代になるかというと、恐らく西暦350年〜380年頃になりそうです。

息子のヤマトタケルは東国を平定して伊勢に戻り亡くなったとされるが、常陸国風土記では、この死を悼み景行天皇は常陸国にも息子ヤマトタケル

がたどった後を偲んで訪れます。
数カ所にしか出てきませんが、その跡を少したどってみたいになりました。

次の地図は昔の地形を再現するために「FloodMaps」という地図ソフトで海面の高さを±mとしたものに風土記に記載された場所を記入したものです。



まず千葉県側ですが、船橋や市川(上総国府)の方から印旛沼近くの栄町あたりにきて「鳥見の丘」に上り、そこからかすみがたなびく先に陸をながめます。

そしてこのかすみがたなびく陸を「霞の郷」と呼ぶようになります。

この鳥見の丘の候補地を2か所記載しました。「印西市小林の鳥見神社」と「栄町の一之宮神社」です。

その後どこへ行つたのでしょうか。

常陸国風土記の信太郡のところに、「大足日子（おほたらしひこ）の天皇（景行天皇）が浮島の帳の宮に行幸されたときに、飲み水に困った。そこで占部をして占ひをさせて、井戸を掘らしめた。その井戸は、今も雄栗（をぐり）の村にある。と書かれています。

この雄栗の村は現在の陸平（おかだいら）貝塚あたりだと考えられており、この井戸が「ぶくぶく水」といわれる湧水だとされます。

この景行天皇が滞在したという浮島の帳（とばり）の宮については風土記の本文には残されてなく、逸文として残されたものがあります。

浮島の通りから少し高台になったところに「景行天皇行在所（あんざいしよ）跡」（お伊勢の台）という碑が立っています。それによると、

この行宮に三十日（みそか）滞在したとあり、この島にいる「賀久賀鳥（かくがどり）」のさえずる声が可愛らしかったので伊賀理命を遣わして網を張ってこの鳥を捕まえさせたといっています。

そして、この鳥を捕まえた伊賀理命に「鳥取」という名前を与えたとされています。

常陸国風土記には景行天王は「大足日子（おほたらしひこ）の天皇」と表記され、日本武尊（ヤマトタケル）は「倭武の天皇」と表記されています。

倭武の天皇についてはたくさん出てくるのですが、大足日子の天皇については上記の2か所（鳥

見の丘と浮島）だけです。

ヤマトタケルは想像の英雄とすると、その父景行天皇も架空の人物であるかもしれません。

でもなぜ東国の風土記の中にあえて2か所に名前を入れたのには何か意図があったのかもしれない。

まあ、風土記が書かれたのは景行天皇の時代からは350年ほど後になりますし、古事記や日本書紀などの神話成立とほぼ同じ時期ですので、この神話の影響は多分に受けているでしょう。



迷い道からどうぬけよう

伊東弓子

一月の学習会は、故郷をもっと知る、故郷を身近かにと勉強したつもりだったが、御留川とどう関連付けていこう、御留川とつながりがないか、いいか、と迷ったので出た。玉里御留川のことも人が生きてきた一つの時代の歴史を知って来へつないでいこう。と、始まったことだったのだから、迷うことはない。今、目の前の霞ヶ浦の近辺で生きるために生活し、歩いてきた人々の姿

を探して見ようと決めた。

春も大分経つてからになったが、舟塚山古墳に行くことにした。中津川のS先生の案内だった。今回北根本、根本の名、所在の影が薄いことに気が付いた。根本は中津川のごく一部だとばかりという先入観があった。ある人が「常磐線であつた切られたからだよ」と、言っていたが、それはどうか。人の話を聞くのもいいものだと思う。この機会に中津川の地形や歴史をよく知ることが出来た。

花の季節もすっかり過ぎて、若草、若葉の中は気持ちよかった。南に霞ヶ浦、東に高浜台、その先に玉里半島、北には石岡の町が続く、そして根本、中津川の台の下を流れていた恋瀬川の先に筑波の峰が周囲の山々を従えるかのように聳えている。古墳時代の人々がこの地に造ろうとした感動を現代人にもわかるだろうか、沢山の古墳がある所なので、「発掘がある程度してから」という運動をした人達の声もむなしく出来る所からと、造られていく。田を埋め、山を削り、木々倒している。発掘のごく一部に江戸時代の男の足跡と荷車の轍（わだち）の跡があったとか、どんな人だったろう。何をしようと歩いたのかと思うと、気になり身近かに感じる。続いて道路を挟んで東側にある愛宕山古墳に登ってみた。今でこそ草を刈りきちゃんと保存されているが、五十年くらい前だったろうか、この古墳が壊されるという寸前、石岡市役所の職員のAさんの努力で一部傷ついただけで、全体の姿は残されたのだった。よかった。その人は今尚、文化財運動に走り回っている。田中の谷津の上に道が続き、玉里のはずれにのび、境を埋めつくし延びていく。

古代道も踏みつぶし、多額の費用を使って何故新しい道路がつくられるのだろう。又事故も増えるだろう。「せまい日本！ そんなに急いでどこに行く」だいぶ前にきいた標語だが、あの時は感動したが、今は単なる言葉になってしまった。人の心も、恐ろしいものだと、自分の心に改めて思う。私は欲張りだ。と今回も思い、反省はしたもの、なかなか直りきれず、計画倒れが多かった。年令も大きくなったのだ。興味もついていかない。とさまざま。見慣れている所だし、深いこと考えなくても言うこともあるようだ。

今回、人数の把握もせず、資料づくりもしなかったことも主催者の落度、気力の無さだろうか。そろそろ幕々の時期か。くよくよと思う日が続いた後、高浜の催しがあった。予定が重なって参加できなかったが、資料を頂き説明を聞いた。それは新しい発見に感動の声をあげた。高浜からは三本くらい府中海道が記されていた。その中の一本が玉里（高崎）、田中、高浜をつなぐ道、高崎はずに道しるべあり、「右、成田山、左、ふちう」と、書かれている。昔の山王川が、三つの村とつながっていた話、大水の時の文書からわかった一寸ゆかい話、「首きりさま」で「風邪をひかないようにお詣りして通る坂、高浜小学校へ行く山道がくねくねと、ゆるい坂を上り下りしている道、学校を過ぎると塚があり、その先は常磐線で削られている。向こう道、城南中学校の前を通り、根本、中津川へ行く古道へと続く、この喜びを妹と一緒に歩きたかった。

獣も仲間を知り、人も自分のいる所から隣りへ行って必要なものを運び、交換し交流していったのだろう。そういう私も家を出て、今日も何かを

求めてここにきたのだろう。と思っている。めげずに次も歩いていこう。

明けにみつつ

暮にいつつと 喜び合う

令和七年十月二日（木）



幸運なまん丸い石

小林幸枝

常陸大宮の歴史民族資料館に行ったので、その地域周辺のスポットを探したら「幸運なまん丸い石」というのがあると知って行ってみました。

「この石はトンネル内から出てきた幸運なまん丸い石です。さわってあげましょう。」と看板に書かれています。

トンネル内から？どここのトンネルだろうか？近くに御前山ダムがあるので、それに関係あるトンネルの工事？

角度を変えてみても丸い。大きな石のボールのよ

うです。

最初に思ったのは海の波や川の流れの力が長い間加わって作られた「ポットホール」、日本語で「甌穴」の石じやないかという説があります。

ポットホールに入っている石は「ドリルストーン」と言うという。

近くに那珂川があるわけで古代の那珂川で作られたドリルストーンが地中に埋まり、最近になって人間が掘り出したものという可能性はないかな？周辺を見渡すと近くに廃校となった「伊勢畑小学校」がありました。

常陸大宮市伊勢畑 2138

東アジアの仏教見聞録を尋ねるⅣ 西方保男

前号に続き慈覚大師円仁の中国求法の旅行記を尋ねていく。これは円仁の中国の唐時代における帰国するまでの十年間を認めた観察記録である。

内容は、時の中国皇帝武宗の激しく厳しい仏教廃仏に遭って帰国するまで、約十年間の日記だ。そこには、仏教についての特別、難解な教義などについての記述などは全くない旅行記なのだ。円仁の鋭い明徹な観察と洞察力には驚愕する。では円仁の日本への苦難の帰国までを稚拙な解釈を省き、前号のようにそのままを辿っていく。

三月三日。仙台的造築が完成して天子に奉る式が行なわれた。

天子は台上に上がり、左右両神策軍の長官、諸高官、道士らも皇帝の後ろに随って上った。天子は

台上にあつて道士をあやしんで言うには「自分は二度台上上つたが、お前らはまだ一人として登仙した者はいないというはどうしたことか」と。道士が「国の中で仏教と道教の二つがともに行われており、黒衣（仏僧）の気がまさつて*（注）（理気が調和しない里氣、人間くささ、邪氣がただよつていて里氣は黒氣のこと）登仙への道を妨げているのです。それゆえ不老長寿の世界に登ることができないのです。と申し上げた。天子は左右両街の功德使に述べて、「お前たちは知っているのかどうか朕はこのような仏教のどんな師をもすべて必要としないということを」と。

数日後に勅がくだり、全国の僧および尼僧で年齢が五十歳以下の者はすべて強制的に還俗させ、原籍地に駅次ぎで送つて帰らせてしまへ。そのあとまた勅あり全国の僧尼で五十歳以上の者であつても祠部牒で発行した僧尼の身分証明書、度牒、祠部は尚書省礼部に属し、祭祀、天文、国忌、卜祝、医薬、僧尼の簿籍を扱つたものを持つていない者はすべて還俗させて原籍地に駅次ぎ送還せよ、長安城内の僧尼については功德使に任せるがこの例にしたがつて取締まり処分せよと。中書門下は勅に従つて諸道に通達した。

長安城内の僧尼に対する功德使の取締まり処分は非常に嚴重である。また祠部発行の身分証明書の無い者と僧尼の数とを勘定して詳しく記録し天子に報告した。すなわち全寺に通達して証明書を持つていない者の家具を没収、官に運ばせた。また祠部発行の証明書を持つていない者でもすべて身柄を拘束、軍隊内に連れていかれ厳しく調べられた。その祠部発行の証明書の上に少しでも汚損した所があつたり、それが生年や所持品のところ

に及んでいると、これを検討したうえ発行した証明書を官に没収、相違のある者はすべて還俗すべき者の数に入れた。微に汚点処（しみ）があつて生年に及べば功德に与えて案じて保牒に入れる。こうしてとうとう全部の寺の僧尼を身分保証のない人民と同様にしてしまった。大衆は口々に「身分証明の辞令文書を選さないというのは僧尼を寺に在住させないという謀略である。また寺の奴婢や錢物を没収するのは寺院を破壊しようとする前兆である」と一言つた。

皇帝が言うには「仙台構築用に土を搬出、運搬した跡の穴はきわめて深く、人をおそれおのかして不安にしている。朕はこれを埋めようと思う。その方法は仙台を祭る日に供養の食事会（「齋」）を設けて仙台を祝賀しようといつわり、すべての左右両街の僧尼を左神策軍内に習合させてその頭を切り、それで坑を埋めるべきである」と。検校のト某がひそかに天子に申しあげていうには「僧尼はもとこれ国家のこれ国家の人民である。もし還俗させれば、めいめいが自分の生活を営むであろう。どうか当該官に仰せつけてすべての僧尼を強制還俗させ、原籍地に駅次ぎ送還し種々の課役に充てられんことを」と。皇帝はうなずき、ややしばらくして「お前の上奏どおりにせよ」と言つた。全寺の僧尼はこのことを聞いて気も魂も消え失せて自信を失い、どう対処していいかわからなかった。圓仁も書状を提出して還俗を請願し、日本国に帰還させてほしいと願ひ出た。功德使はこの文書を受け取つたがまだ決定はおりない。ただなんども手紙が届けられ安心していうようにとのことであつた。

功德使はすべての寺に通達を出していうには

「勅にしたがつて取り締まるので僧尼は寺から外出してはならない。必ず召使五、六人で寺門を守らせ僧尼の外出を許すな。もし違反する者があれば綱維（寺主・上座・維那、三老（長老）、典直（典座・直歳・庫司）および門を守つていた者はそれぞれ二十回のむち打ちの刑に処し、寺を外出した僧尼は策軍は天子を護る禁軍（近衛）である。年ごとに十万の将兵が置かれていた。古い時代から君主に対して頻繁に家臣が叛く災難が発生しているのでこの軍を置くようになったのであるが、それ以来あえて天子の位を奪う者はなくなつた。勅によつて中尉（護軍中尉、軍長官）ごとに官印を賜うことになつており初めて任命される時には勅にしたがつて兵馬を出して印を迎える。それは特別な公事の卯實施なので南司には属さなかつた。

天子は本年四月の初め勅を出して左右神策軍の官位の返還を求めた。しかし軍長官は印の返還引き渡しを承知しなかつたので再三に渡つて印の返還を求める勅が出された。天子の意図は護軍の官印を返還させたのちこれの中書門下（内閣）に与えて宰相に管理させ、左右両軍の一切のことを宰相に取りしきらせようとしたのであつた。ところが左軍中尉の官官揚欽義葉即刻官印を納めることを承諾したものの、右軍中尉の宦官魚弘去は印の返還を了承せず、ついに天子に上奏して言うには「官印をお迎えした日には兵馬を出動させてこれを納めるべきである」と。中尉の意図は天子がこれを許すならばこれに乗じてただちに兵馬を動かし政変を起こそうということであり、ひそかに兵馬出動の準備を整えさせた。天子は恐れをなしてしばらく返還を求めないことにした。

聞くところによると、功德使が僧尼を条令によ

って処理し還俗させる件はその順序方法を協議した結果、次のとおりになったという。いまや三十歳以下(四十歳以下の誤りか?)の者については還俗をおわらせたので、次には五十歳以下の者を還俗させる。次いで五十歳以上で祠部発行の身分証明書のない者を還俗させる。第三蕃に祠部発行の身分証明書の調査によって内容に相違ある者を還俗させる。最後に祠部発行の身分証明書を持つていて内容に相違のない者もすべて還俗させる。これで僧も尼僧も全くなりなるわけである。この様な協議による還俗段取りの取り決めは全国いずこも全く同様であった。

四―五月。天子の勅にしたがって実行されたために四月一日からいっせいに年齢四十歳以下の僧尼僧の還俗が始まり、駅次ぎにその原籍地に帰らせたので毎日三百人の僧が還俗した。こうして四月十五日には年四十歳以下の僧尼は全くなりなくなった。次いで四月十六日からは五十歳以下の僧尼の還俗が始まり、やがて五月十日には全くなりなくなった。そしてさらに五月十一日からは五十歳以上で祠部の証明書を持つていない者の還俗が始まった。

前年からこれまでは僧尼を条令によって整理するに当たっては、素行が粗暴で本来の仏教の精神に依っていなかった者を選んで還俗させ、駅次ぎに原籍地に帰していたのであるが、本年は行いのいかんを問わず、また修験僧も大徳、内供奉どんな身分にありどれほど徳行が歩かないかなどもお構いなしで、ただ年齢の順序次第によって、還俗させるだけでの人数はどれほどか、まだ還俗しないで残っている者がどれだけいるかを問いただし、催促してその数を報告させた。

外国の僧はまだ条令の適用を受けていなかったの、功德使は特別に上奏して天子の採決をもらった。勅があつてそれには「外国僧らも、もし祠部発行の証明書を持つていなければ同様に強制的に還俗させて駅次ぎに出身国に帰せ」とあつた。

西方の国北インドの三蔵難陀は大興善寺に居住していた。南インドの三蔵宝月と弟子の四人は中インドで仏道を修め、合わせて密教の持念祈禱の儀軌の大法にも通じ、戒行を律することもきびしく細部にわたり広く経や論を理解し青竜寺に居住していた。この二人の三蔵法師はいずれも唐国祠部発行の証明書を持つていない。新羅の国から来ている僧もまた祠部発行の証明書を持つていない者が多い。日本国の僧圓仁、惟正もまた唐国祠部発行の証明書をもっていない。功德使は勅に従い、これらの外国僧も結局還俗させる側に入れた。

また全寺に通達がだされ、それには「もし僧尼で還俗にしたがわれない者がいれば違勅罪に科し、すぐさま死刑にする」とあつた。このことを聞いたのですぐ旅支度にかかり文書や写し取った経論・密教儀軌・曼荼羅等を荷作りして全部梱包し終わった。

書類と衣服は合わせて四籠(つづら)あつた。そこで三頭の驢馬を買って官の決定書が来るのを待った。還俗させられることが心配だったのではなく、ただただ写し取った聖教典籍や仏画を身につけて日本に持つて行くことができなくなることを中心配したのであつた。

またまた勅があつてひどい仏教弾圧が続いているので、帰国途中の諸州や府の点検で荷物の中味が見つかり違勅の罪に処せられるのではないかということを恐れている

五月十三日。功德使から外国僧で祠部発行の証明書を持たない者を還俗させ本国送還を命ずる通牒が届いた。当資聖寺に居住している僧で唐国祠部発行の証明書を持つていない者は三十九人で、この中に日本国の僧圓仁と惟正の二人の名も入っている。先に還俗した僧林宗と信観は相談して下州(河南省開封)まで我々を送っていくことを許されたいと真剣に願ひでてきた。下州は長安京から一千四百里(約七八〇キロメートル)のところにある。他国人の親切さを見てその厚情には断わり切れないものがあつた。三綱(寺の役僧)、三老(長老)らがやつて来て、ともども心配して言うには「遠く他国に渡つて来てこの天子の災難に遭いお気の毒です。これではどうにも僧服を改めて還俗せざるを得ません。古くから今日に至るまで、仏法を求める人には決まっているいろいろな障害や難儀がありました。

しかしこの災難がなかったならば帰国するきつかけもつかなかったであろう。また聖教(仏典仏画)を日本の国に持ち帰ることができることは喜ばしいことで、それは本来の願ひにもかかつているからである。

三綱の一人都維那(庶務担当の僧)の僧法遇は檀龕像(白檀等の材で懷中に携帯できる小形の仏像、守り本尊)一体を帰国の錢別に供養してくれた。夕刻、寺の僧全員に別れのあいさつを終えて一般世俗人の着物をまとい還俗の姿となった。

五月十四日。早朝、京兆府の府庁に行つて旅行証明書の交付を願ひ出た。恐らく公けの証明書をもっていないと道中が困難であろうと思つたからである。西方インドの三蔵法師ら七人も同様に京兆府で証明書の交付を求めている。府の役人は決

裁して二通の旅行証明書を発給してくれた。その証明書には公路の州県は必要な人を差し出してつぎつぎと通過させよとあった。

そもそも会昌元年からこれまで功德使を通じて文書を提出し、日本国に帰りたいと請願すること合計百余回に及んだのだった。また以前数人の有力者(要路の大官に)頼んで物を贈ったりなどして帰国の許可を得ようとはかったが、どうしても帰国することを認められなかった。それなのに今、僧尼が、強制的に還俗させられるという災難に遭うことによってまさしく帰国することができなくなったのである。一方では廃仏のことを悲しみ、一方では帰国できることになったことを喜んだ。左神策軍の押衙・銀青光祿大夫(従三位)・檢校国子祭酒(名譽学長)・殿中監察御史(宮中儀礼長官)・上柱国(勳二等正一品)の李元佐(新羅人で仏教信徒、会昌三年八月十三日の項に左軍中尉の親事(側近)とある)は、自分が日本に帰りたいと相談に行ってから互いに知り合いこれまで二年近くになる。たいそう義理人情の厚い人で最も親しくなり、長安滞在中は不自由なことがあると、なんでもよく補助してくれた。しかし功德使には宗教心がなかったから、圓仁らの帰国のことを李元佐が相談しても許可してくれなかったのだった。京兆府庁に居た間(十四日夜)もまた食事や寝具等を手当てしてくれ親切に助けてくれた。

特に使いの者を寄こして「いつ長安城を出られましか。どの道をとって行きますか」と聞いてきた。また団茶(丸く練り固めた茶)一串をくださった。万年県の県役所にいる間にお礼の書状をしたため感謝の意を表した。資聖寺の内供奉談論大徳知玄は昨年郷里に帰ってそれ以来消息が分からなかったが、今ひそかにやって来て頭を包んで揚敬之卿の邸宅内に隠れていた。彼は童子(僧をめざしている少年)の清涼に手紙を持たせて自分の所に届けさせたが、その手紙の文章の中に「潜別」(ひそかに別れる)ということばがあり、非常に悲しくみじめな思いがした。自分と同じ資聖寺にあつて維摩經・大乘百法を講義していた雲栖座主と涅槃經を講義していた雲栖座主と涅槃經を講義していた靈莊座主は、一足先に四十歳以下の還俗の勅令で還俗していた。いま頭を包み世俗人の衣服を着てやってきたので万年県の役所内で会った。李侍御が外甥の院十三郎と共にやって来て慰問してくれた。彼らは旅行荷物の面倒をみてくれ、行ったり来たりして剃った頭をかくすためにフェルトでできた帽子などを買って与えてくれた。また資聖寺に行つて文書や驢馬に積むつづら等を点検した。雲栖座主も驢馬に積むつづらを受けもつてくれ一緒に整理を手伝ってくれた。

それらの荷物類を身につけて持つて行けなくなることを恐れて早速この日の夕刻長安城を出た。万年県の役人は私どものために人を出して駅次ぎして昭応県に送ってくれた。ここは長安城から八九十里(約五〇キロメートル)のところである。

李元佐侍御と雲栖座主も同様に送ってくれ、長安城の春明門の外に出て茶を飲んだ。揚敬之卿が人をつかわして手紙を送つて来て言うには「あな

たの仏弟子は、手紙を五通をいずれも手書きして行く先々にある州県の旧知の役人宛てにしたため、あなたに託しました。ただこの手紙を持つて当人に手渡すだけで本当にお役に立つことと思います」とあった。

職方郎中(兵部職方、地図等を管掌する長、従五品)で緋衣と魚袋を賜つた楊魯土は以前勅命を奉じて長安京の管理に就任した際、資聖寺を宿舍としていたことがあり、そのとき彼は私どもを親切にいねいに慰問してくれた。またかつて数回資聖寺にやってきて、何か不足しているものはないかと調べ、以前に絹や毛織物の肌着類や下帯などを施してくれたことがあった。彼はその子息に手紙を持たせて私の所に来させ、銭別として絹二疋(約二五メートル)、蒙頂茶(四川目省雅州名茶)二斤(約一・二キログラム)、団茶一串、銭二貫文(二千文)を送つてきたまた行く先々に宛てた書状二通のほか別に名刺に書いた紹介状(「手札」)も入っていた。長安の市場施主揚某も人をよこして絹一疋、毛の布一端(五丈、一五・五五メートル)と銭一千文を旅路の費用にと贈つてきた。そのほかの見送りに来てくれた人々については、いちいち詳しく記録することができない。いずれも春名門の外でお辞儀をして別れのあいさつをし「見送りはここまでです。ここでお別れです。ご機嫌よう。揚敬之卿の使いの者と李元佐とは去り難く、とうとう長樂破(長安の東郊、春名門外東約三キロメートル)の近くまで送つてきた。長安城から五里行つたところである。そこにある一軒の旅館に一夜同宿していろいろな話をした。

李元佐侍御蚊らの銭別もすくなくなかった。呉綾(呉・蘇州地方)で織つた綾絹十疋・檀香木一

本・梅檀で作った携帯用の仏像二種・和香(いろいろな香を合わせたもの)一びん・銀の五股の抜折羅金剛。五つの鉾先をもついわる五鉾杵。鉾杵(こしよ)は古代インドの武器で、金剛杵は堅固であらゆる煩惱を打ち砕く菩提心の象徴でもある密教法具の一つ。フェルトの帽子二つ・銀字の金剛経一卷・軟らかい靴一足・銭二貫文等であり、詳細な目録は別紙に書いておいた。彼は心を込めて別れをおしんでこう言った。「あなたの仏弟子李元佐は輪廻多生してお会いできてしあわせでした。和尚が遠く日本からやって来られて仏法を求める時に遭うことができ、数年の間供養をいたしました。が、心はまだ十分満足しておりません。一生和尚のお近くを離れ難く思っております。和尚はいま天子の災難に遭って日本に帰って行くこうとしています。この弟子が考えますに今生ではまさに再びお会いすることはあり得ないでしょう。来世は必ず諸仏のおられる浄土でまた今日のように和尚の弟子となりましょう。和尚が成仏されるときにはどうかこの弟子のことを忘れないでください、云々」と。また言うには「和尚が着ていた納袈裟納衣、ぼろ布を縫い綴った法衣」をどうかここに置いていって私にください。家に持って帰り、死ぬまで焼香供養します」と。こう言われてしまったので納袈裟を元佐に贈った。阮十三郎もまた同様真剣に仏縁を結んだ。

* 大唐中国皇帝、武宗の激しい仏教大弾圧に遭遇した慈覚大師円仁が、必死に日本への帰国を念じる苦難は言語を絶する。

次号へ続く。

【風の談話室】

《読者投稿》

猛暑日の新記録、9月に入ったのに暑さは留まることを知らない。我が家の敷地内は、何処も彼処も草だらけ・・・地球の生き物の中で最強は草かな？

【7月】

・園部公民館主催の歴史散策で宇都宮の大谷資料館に行ってきた。大谷石の地下採掘場跡地、深さ3メートルもあるという巨大な地下空間、長く続く石の階段を降りていくと地上とは別天地、気温5度程度で思わず上着を羽織った。先人たちは手彫りで石を切り出し、80キロもある石を担いで地上に運んだとの事。それが昭和30年頃、機械を使うようになるまでの長い間続いたと言う。その後はバスで20分程の所にある道の駅ロマンチック村で昼食、此処は又、途轍も無く広い。道の駅の中に、宿泊も温泉もある。いろいろなエリアを散策した方もいたが、私は買い物と、かき氷を食べたりしてゆったりすごした。寒さと酷暑両方あじわった1日だった。

・今朝は早朝より、集落のコサ払い。体調崩した夫の代わりに参加、20数名集まり道路に突き出た木々や側溝の掃除などをした。此処はお庚申様や痘瘡様が祀られていて、以前は当番で掃除をしていたが、こうして集まって一気に掃除をするようになり、気が楽になった。次はあそこをやるうとか、いろいろな意見もでたり、新規移住者の紹介の場になったり、有効な場になっている。私も熊手

とホウキを持って頑張ってきた。

・笠間歴史交流館井筒屋に行ってきた。古くから旅館として賑わって来た笠間市の井筒屋・・・震災後リノベーションされ、今は公共の施設として使われているようです。その日は、陶芸家、民話の語り、イベントの司会、そして歌手、と、多岐にわたり活躍している山口由実さんのコンサートがあり聴いて来た。ボサノバや昭和の歌中心に楽しいトークを挟んで、とても楽しんで来た。

【8月】

・お盆に、盆参りを済ませ・・・何処のお宅も静かな静かなお盆だった。久しぶりに知人の家にもよって見た。丁度糯米を蒸かした所だからとパックに詰めてくれた。お盆だから・・・白蒸かし、という事で糯米に、白インゲンをいれ炊いて白胡麻をかけた物です。地域によっては普通の赤飯を炊く所もあるようです。帰りには玄関先にゴロゴロしていたスイカや瓜等頂いて来ました。8代半ばのご夫婦何より元気で良かった。頂いたスイカを割って見ると最高の食べ頃。わが家では初物で・・・超美味しかった。

・16日17日とフラワーパークにてフラワーナイトマーケット・・・竹の師匠も出展したので、お手伝いに行ってみた。お子さまは、夏休み中入場無料なので家族連れが多く、浴衣姿の方も多く、手持ち花火のコーナーやら花すくいコーナー、子供達のコーナーは賑わっていた。家族で楽しんでるのを見るとところが温まります。お花もひまわりや紫陽花バラなどまだまだ見頃です。師匠の

コーナーの風鈴も涼やかな音を響かせ夏祭りを盛り上げていた。薄暗くなつて来た頃キッチンカー“元気さん”のラーメンを食べて帰つて来た。

・暑さが続いています。8月後半、部落のブドウ屋さんの直売所も始まった。わが家のブドウも凄いい事になっている。粒は揃っていないがまさしくブドウです。栗も大きなイガに育っています。秋はすぐそこまで来ています、がんばろう。

・稲穂が豊かに実り、刈り入れの季節になり……。幸い台風被害もなく稲刈りを迎えられ、米農家さんも安堵しているようです。お隣さんも昨日は日が暮れるまでライトをつけてコンバインが動いていた。そして、一晩中乾燥機が作動していた。美味しい新米を食べられる日も間もなくです。

【9月】

・石岡のお祭りが13日から3日間、いよいよ始まります。クラフトの仲間がクラフトテープで獅子を作りました。お祭で何とか販売を……。模索したが、伝手が見つからず？

・まだ残暑のうち……。里山に子供達の声がかだましていた。近くにはバスが3台。中学生らしい子供達が揃いのジャージ姿で稲刈りの体験学習中。車を降りて、暫くの間覗いていた。刈り取った稲が、綺麗に揃えて竿に掛けられていた（おだ掛け……。今どき珍しい風景。なんとも懐かしい里山の風景です。

・石岡市と桜川市をつなぐ上曽トンネルが愈々開

通です。全長8,388キロ。それに先立ちプレイベントの、トンネルウォークに参加しています。物販や飲食ブースもあり、私は竹の師匠のコーナーの、いっかくに、クラフトで作った獅子を出すことにした。石岡では終わつたばかりのまつりの余韻がまだ残っており、

興味深げに見て、買い求めていた。トンネルウォークのイベントが号砲と共に始まり、どんどん人がやってくる。家族連れ、マラソンスタイルの若者、色々なグループ……。皆さん楽しそうです。

・明け方ゾクッと寒さを感じ目が覚めた。もう、夏掛けに何か追加しなければ、そのまま起きると5時ちよつと過ぎ、すでに夫は起きていてコーヒーが入れている。コーヒーを飲みながら外に出て空を見上げると、空一面の鱗雲、筑波山の方から東に果てしなく流れて行く。こんな美しい鱗雲初めて見た感じ。午後はそば所「まんまや」での、フルート、クラリネット、ピアノのコンサート。楽しい演奏にお久しぶりの方々が再開、いい秋日和でした。

・栗の美味しい季節です……。ところがイノシシもこの栗を狙っています。先日から畑が荒らされ、栗も上手に皮だけ残し食べています。地面も耕して行ってくれています。新聞配達の方がわが家の隣の柿畑で5匹の猪と遭遇し怖かったと話していました。おお、怖を！

坂本九と茨城県

木村 進

戦後80年を迎えた今年、その丁度半分の40年前にあの日航ジャンボ機墜落事故がおこった。私も、あの夏の日のニュースは大きな衝撃を受けテレビに映し出された映像を今でも思い出すと胸が痛む。坂本九さんがその飛行機に乗っていて亡くなり、御巢鷹山の山中で朝から救出が始まり4人の方が助かったが多くの乗客・乗員は助からなかった。私にとってもこの事故は特に記憶に残っているものである。

当時、私は勤めていた会社の新聞編集委員をしていた。これは、それぞれの部署から1人ずつ編集員が選ばれ、持ち回りで会社の新聞のコラム欄の執筆が任された。私はたまたまこの墜落事故のあった時に、このコラム記事（新聞で言えば天声人語のようなもの）の順番が廻ってきたのだ。

これは、記事のネタにせねばならないと、文学的な文章などとはほとんど縁が無かったが、何とか書き上げて9月始めの締め切りに間に合わせた。

このとき、私は「現在、人生の中間点に差し掛かった筆者であるが……。」「という言葉を使った事を覚えている。事故原因はいろいろと取りざたされていたが、「圧力隔壁の疲労破壊」というのが大筋であった。手元にその時の記事は残っていないが、この「疲労破壊と検査ミスなどを仕事の戒めとして自分たちの仕事を見直したい」などと戒めの記事としてまとめた覚えがある。

この羽田発大阪行きの日航ジャンボ機は8月のとても込み合う時期でもあり、多くの乗客を乗せていた。その中に歌手の坂本九さんがいた。本来は全日空を主に飛行機は選んでいたが、当日のチケットが取れずにこの日航機に搭乗することになったのだとか、何か運命的なことも聞こえてきたが、

坂本九さんと茨城県も運命的なつながりがあり、少し紹介したくなりました。

坂本九さんは神奈川県川崎市で、生年12月10日に生まれました。本名は「大島九（ひさし）」。

名前のおり九番目の子供でした。父親は坂本寛。母親は「いく」でその旧姓が大島です。

九の誕生日は真珠湾攻撃の2日後で、太平洋戦争に突入した時に生まれたのです。

そして、戦争が激しくなり、母親と茨城県笠間市に疎開します。（九ちゃんの家）

この笠間は母親の実家があった場所で、坂本九の結婚式を笠間稲荷で挙げたため、意外に知られていますが、あまり知られていない事実があるようです。

実は、笠間に行こうと上野を列車で母親と出たのは1943年10月26日です。2歳にまだならない子供でした。

この常磐線の列車が土浦駅で貨物列車と衝突し4両が脱線し、そのうちの1両が桜川に転落し死者110名、負傷者107名の大惨事が起こりました。

この時、実はこの川に転落した車両に最初は坂本親子は乗り合わせていたそうです。しかし、途中で車両を移ったために無事だったといえます。このことも笠間稲荷信仰の元になっていたようです。

本名の大島は母親の旧姓で、両親が離婚したので坂本から大島になったそうです。

実は、この鉄道事故の話はさて置き、坂本家がここ霞ヶ浦にも深い関係があるようです。

霞ヶ浦大橋の手前あたりを「田伏」といいます。

ここに坂本九の祖父が住んでいたそうです。祖父の名前は「坂本金吉」といいます。

実はこの方は魚の行商等をしていたようですが、秋田の八郎潟で魚がたくさん取れると知り、妻と息子（坂本九の父親）を連れて、八郎潟に移住しました（明治30年代）。そして、霞ヶ浦でおこなわれていた帆引き船の漁法を八郎潟に教えた人だといえます。秋田ではまたこれを改良して「うたせ舟」漁法と言われているようです。

八郎潟のこのうたせ舟は干拓が始まる頃まではたくさん湖に浮かんでおり、八郎潟の風物詩となっていたようです。

こんなつながりを知るとまた大島家の方とも茨城のつながりを感じますね。

石岡に残された「忠犬タロー」物語。九ちゃんの長女「大島花子」さんの歌が幼稚園児の声で聞こえてきます。

歴史上の気になる人物

木村進

（1）ー 藤原秀郷

さて、この藤原秀郷（ひでさと）の名を知っておられる方はどれくらいいるのでしょうか？

大ムカデ退治の倭藤太（たわらのとうた）のことだといえ少し子供の頃に日本昔話的な歴史本には必ず登場していたので思い出される人もおられるかもしれません。

また、平将門を退治した人物で、関東の源氏、平氏と肩を並べる関東武士団の藤原流の祖であり、奥州藤原氏の祖でもあるといえましょう少し理解は広がるかもしれません。

私がここでとり上げてみようと思ったのは、この大ムカデ退治の伝説が何処から生まれたのか、その背景を知りたいと思ったからです。

その参考には、栃木県立博物館が2018年秋に実施した企画展「藤原秀郷ー源平と並ぶ名門武士団の成立」（第122回企画展）で作成された冊子の内容を使わせていただきたいと思います。



まず、関東などの東国に、源氏、平氏などが武士の基盤を作って行きましたが、話せば長くなってしまうので、詳細は省きます。

さて、この藤原秀郷は、今から1000年以上も前に起きた平将門の乱を鎮めた立役者として、名を馳せ、その後関東北部へ勢力を拡大していきました。

その中心は栃木県などが主流ですが、私の住む茨城県でも少し北へ行くとこの藤原秀郷子孫が活躍しています。那珂氏や、その後に出た常陸江戸氏などがそうです。

常陸国風土記に「粟川」として登場してくる那珂川は常陸国の重要な大きな川ですが、この那珂川の名前の由来についてもおそらく、この那珂氏が

住んだ地名「那珂」があり、それが川の名前になつて行つたと考えることも出来るでしょう。

勿論、地名の「那珂」が先にあり、その名前にはおそらく別な意味が含まれていると思われるが、今回はこの関東北部の武士団（藤原氏）の祖としての藤原秀郷はまた別の機会にするとして、藤原秀郷にまつわる物語「倭藤太物語」を検証していきたいと思います。

御伽草子に記載されていますが、内容も長くなりますので、博物館の冊子などに少し手を加えてここに記載させていただきます。

上【大ムカデ退治の話】

朱雀天皇の時、従五位上村雄朝臣（むらおあそん）の嫡男で田原（たわら）の里に住み、田原藤太秀郷と呼ばれる勇士がいた。

そのころ、近江国（現：滋賀県）の勢田の橋（瀬田の唐橋）に大蛇が横たわつて人々の通行を妨げることがあった。

しかし、そこを通りかかった秀郷は、臆することなく大蛇を踏みつけて平然と渡つて行つた。

その夜、美しい娘が秀郷を訪ねてきた。この娘は琵琶湖に住む龍神一族の者で、昼間秀郷が踏みつけた大蛇はこの娘が姿を変えたものだったので、娘は、秀郷が勇猛な人物と見込んで、次のような頼みごとを秀郷にしました。

「私は、この近くの三上山（みかみやま）にいる龍神一族ですが、ここに大ムカデが住みついて、大変苦しめられています。こうして姿を変えて勇氣のある者を探していました。貴方様の勇猛さを見込んで、是非、この大ムカデを退治して欲しい

のです」と懇願したのです。

秀郷はこの願いを引き受け、先祖より伝来の太刀と弓に三本の矢を持つて三上山に向かいました。するとそこには、山を七巻半する大ムカデが現れたのです。（この七巻半は鉢（八）巻きに届かないとの意味がある）

秀郷は得意の矢を、1本、2本と射たがすべて大ムカデには通じず、はね返されてしまいました。とうとう最後の一本の矢になった時、ムカデは唾（つば）に弱いことを思い出し、矢の先（鏃）に自分の唾をつけ、南無八幡神大菩薩と唱えて、願いを込めて矢を射ると、矢は大ムカデに見事命中して、ようやく射止めることができたのです。

翌朝再び娘が現れ、大ムカデ退治の礼として、巻絹、首を結んだ俵、赤銅の鍋を秀郷に贈りました。俵は米を取り出しても尽きることがない不思議なもので、このことから秀郷は「倭藤太（田原藤太）、たわらのとうた」と呼ばれるようになりました。

また、湖水の主の龍王は「御身の子孫のために、必ず恩を謝すべし」といって、黄金づくりの鎧と太刀を与え、「これで朝敵を滅ぼして將軍に任ずるように」といい、さらに、「日本国の宝になし給え」と釣鐘を与えたのです。

秀郷は、この鎧と剣は武士の重宝として子孫に伝え、釣鐘は三井寺（滋賀県大津市）に寄進したのです。

下【平将門の乱の平定】

やがて、下総国の平将門が新皇を称して反乱を起こした。

藤太（秀郷）は、最初、将門に同心して、日本国

を半分得ようと将門に近づきましたが、将門の軽率な言動に落胆して、すぐに京に行き天皇より将門追討の宣旨を受けたのです。

その後、三井寺の弥勒菩薩と新羅大明神に祈願して再び東国に向かいました。

藤太は京から将門追討で出発した平貞盛の軍と合流して将門と戦いましたが、あまりにも将門が超人的であつたため、戦に敗れ、正面から戦っても勝てないと悟つたのです。

そこで宇都宮大明神（二荒山神社）に祈願し靈剣を賜り、将門にへつらつて館に移り住み、そこにいた将門の妾の女性と契りを結び、そこで、将門の弱点を聞きだしたのです。

それは、将門の姿は七体に見えているが、その本体には影があること、また「こめかみ」が将門の急所であることでした。

そして、得意の弓矢でこの急所を射る事が出来、ついに将門を討ち果たすことができたのです。

そして、将門の首を持つて京に戻つた藤太（秀郷）は、恩賞として従四位下に叙されて武蔵・下野両国を賜り国司となり、京より東国へ下つたのです。

そして、蒲生氏、小山氏、宇都宮氏、足利氏、結城氏、長沼氏、皆川氏、佐野氏、小野寺氏、蒲生氏、那須氏、奥州藤原氏・・・などへ発展した。

さて、この物語はこの藤原秀郷の武勇伝を誇張しながら、作られた話であるとは思われますが、その背景にはどのようなことが意図されていたのでしょうか？

まず、この博物館の冊子には、この伝説と関係すると思われる「日光山縁起絵巻」が紹介されています。すこし、紹介します。

「日光山縁起絵巻（上下二巻）」は、古代より山岳

信仰の霊地として栄えた日光山の縁起物語を描く。日光山の縁起であると同時に、宇都宮明神（宇都宮二荒山神社）の縁起も説いている。……………

日光戦場ヶ原の地名の由来になった、大ムカデと大蛇の戦いと猿丸による大ムカデ退治の神戦譚には、龍神に依頼され大ムカデを退治した俵藤太伝説と共通するものがある。すなわち、人間が神の依頼を受けて神戦に参加し、一方の神を助けて勝利をもたらすと、神は助力を感謝して特別の恩恵を施すという構図である。

俵藤太が龍神の庇護によって将門を倒したというのも、この構図に当てはまると考えられる。

ただ、この日光山縁起絵巻が何時成立したのかは古い版が逸失していて明らかではなく、南北朝時代にはすでに存在していたのではないかと見られるとしている。

俵藤太伝説はこの日光山縁起から派生して成立したのではないかと考えると、秀郷は新皇となった平将門（＝大ムカデ）から天皇（＝龍神）を助けた英雄として捉えることが出来る。

舞台が近江であり、秀郷はここに行つた形跡が無いが、近江が都の境界であり、この都の番人として秀郷を考えたこと、また都でこの秀郷流藤原氏が活躍していたことなどが関係しているのではないかという。

まあ、今回はこの程度にして、関東の三大武士団といわれる藤原秀郷流の位置づけなどを今後考えるためのヒントとして残しておきたいと思います。

松浦静山 甲子夜話 卷39【1】より

これは江戸時代の（長崎）平戸藩の藩主であった松浦静山公が晩年の20年間に毎日書き残した随筆集「甲子夜話（かつしやわ）」の中に挿入されている2人（水・雲）の手紙による問答集を理解しようとする試みです。

水雲問答（50） 奸智を以て善をなすのは

雲…

奸智（かんち）の人悪事を為すに、譬（たと）えば五なさんとするに先（ま）ず、十と云う。君子これを争つて五にするも、すでに彼が術中に落ちて然（し）も知らず、其（その）術巧（たくみ）なりと云うべし。今それを善道に翻（ひるがえ）して、好事（こうじ）を斯（か）くの如く行わば、其益最も多かるべし。

（訳）

ずるがしこい知恵にたけた人が悪事をはたらく時、たとえば、五つのことをしようとすると、まず十と言う。君子がこれと争つて五つにしても、もうすでに悪賢い者の術中にはまってしまっており、術中にはまっている事すら知らずにいます。その術は実に巧妙であるといえます。今それを、善の道において、善い事をこのような術で行いまずと、そこから得られる益は極めて多い事になるでしょう。

水…

此説非なり。君子小人は氷炭薰蕕（ひょうた）

んくんゆう）、いかようになしても合いがたし。小人智術を設けて君子を待つ時、君子も其術を仮（か）りて彼に勝つて善事を為さんとする時は、君子にして小人の術を用ゆるなり。事の善悪は、瘰癧（けいてい）なけれども、心術既に正しきを失い候。さあれば、たとえ一旦（いったん）細大のことは為し得べけれども、恒久にすべき道に非ずと申すべし。

（訳）

この説はいけません。君子と小人（しょうじん）は氷と炭、薰（くん）よい香りの草）と蕕（ゆう）悪臭を放つ草い）のようなもので、どうしても合いません。小人が悪知恵を使つて君子に挑戦する場合に、君子もし同じような小人の術を使つて小人をやっつけて善い事をするとしましよう。事の善悪は瘰癧（けいてい）（へだたり）がありますが、その心術はすでに正しきことを失っています。たとえ一旦このような方法で事が成し遂げられたとしても、恒久にすべき道ではないと申し上げておきます。

水雲問答（51） 君子の志を立てるは高かるべし

雲…

君子の志を立てるは高かるべし。事実を做出（つくりだ）すは早くす当（べ）し。この所深意思あり。

（訳）

君子は志を立てるときは高くあるべきです。そして早く実行して結果は早く出すべきです。この

水雲問答

（10）

（木村 進）

【はじめに】

考え方は深いと思います。

水…

所見所記、不可不遠且大、然行之亦復須量力有漸、志大小勞、力小任重、恐終敗事（明道程子の語）

（読み）

見る所記する所、遠くかつ大ならざる可（べ）からず、然（しか）れども之を行うには、亦（また）須（すべから）く力を量（はか）りて漸（ぜん）有るべし。志し大にして心を勞し、力小にして任重くんば、恐らくは終に事敗れん。

（意味…少し意味は違っているかもしれませんが）

見たもの、書くものは、とおくにして且（か）つ大きなものでなかつんばできず、しかも之を行いて、またふたび、力を量つて、少し前に進むべし。志しが大にして労が小なく、能力が小にして任務が重ければ、恐らくは最後には事に失敗するでしょう。

（明道程子…程顥（ていこう）、明道先生と称された。朱子学・陽明学の源流の一人）

これは1176年に朱子学の書としてまとめられた「近思錄」爲学22に収録されている。

所見所期、不可不遠且大、然行之亦須量力有漸。

志大心勞、力小任重、恐終敗事

水雲問答（52）謀に精細にして、行に軽率なるべし

雲…

古今の人軽率に敗るることを知て、その軽率の益多きことを知らず。精細の益多きことを知て、しかも精細の害甚しきことを知らず。大事をなし出さんとする者は、謀に精細にして、行に軽率なるべし。独り大事のみに非ず。凡ての事斯くの如し。

（訳）

今も昔も人が軽率であれば失敗することは皆が知っています、その軽率が実は益が多いということとは知りません。また、詳細（細かなところまで詳しくやる）の益が多いことは知っていますが、この詳細にも害が非常に多いということを知らません。大事をなさうとする者は、謀（はかりごと、計画）は詳細（細かく研究）にして、行動は軽率である（躊躇せずにとさつとやる）べきです。これは大事のことに限ったことではありません。すべてのことに当てはまります。

水…

軽率の字病（へい）あり。濶略に易（かふ）べし。是は今人頂門の砭針（へんしん）語に候。

（訳）

（云うことはわかりますが）軽率という字には弊害があります。できれば「濶略（かつりやく）」（おおまかにやってみよう）と言い換えた方が良いでしょう。これは今の時代の人には「頂門の砭針（へんしん）」（頭の上のつばに刺す針＝急所を突いた戒めの言葉）の言葉です。

水雲問答（53）

事を為し得る者、勢いにあり

雲…

大小のことなし得る者、勢にあり。然（しか）れども勢に任ずるときは害を招く。勢を用るは、勢を用ひずして勢を用ゆるにあり。禹（う）の水をやるも、其（それ）ことなきの処にやるのみ。正剛の二字を納（おさめ）得れば、勢ひ自（おのづか）ら彼の心にあり。然かして和楽の徳を以て行ば、蛮夷（ばんい）と云ふとも服すべし。況（い）わん）や天下の人をや。

（訳）

大きいこと小さいことすべて成し遂げられる人には「勢（ぜい…いきおい）」があります。しかし、勢のあるものに地位を与えて任用して行わせると害が起ります。この勢を使うには勢を使うことなく、勢を用いる必要があります。中国古代で、黄河の治水に初めて成功し長期に亘る王国を建設した夏の禹（う）王は、水を流すにしても、大問題（大きな被害に）とならない所に水を流しております。正と剛の二文字を習得いたしましたら、勢いは自然と心に備わってきます。こうしてから和楽（和やかで円満な）の徳をもって事を行えば、周辺の蛮族、蛮夷などの敵であつてもその徳に服するに違いありません。ましてや天下の人々だつて服するに決まっています。

水…

此論…体認語と承候。惜む所は措語（そご）病（へい）あり。高意は随分了し申候。

（訳）

この論は、貴方ご自身の言葉（語）であると承

ります。しかしながら、惜しいところは、云われている言葉に齟齬（くいちがい）があり、欠点があります。ただし、謂わんとするご意見はよくわかりました。

（コメント）

確かにこのやり取りは少し内容が良く理解できません。言葉に病（へい）があるからでしょうか。

水雲問答（54） 今の一会

雲..

人は今の一会（いちえ）空しく過ぐすべからず。喻（たと）えば一生の間往（ゆ）いて返らざる旅の如し。この山水好景、再び攀（よ）じがたし。務（つと）めて即（すなわ）ち今の苦勞を忘れて、功を立て、名を残すべく候。再び好景勝地を探らんとする内に、何（いつ）か半途にして身を終るに至り候。

（訳）

人は今瞬間の出会いをむなしく過ごしてはなりません。たとえば一生の間において出かけて戻ることのない旅のようなものです。いま見ている山水の素晴らしい景色をもう一度見たりよじ登ったりすることはむずかしいのです。できるだけ努力をして今当面している苦勞など忘れて、いまのうちに手柄を立て、名を残すべきです。（そうしない）とまたあの素晴らしい景色の地を訪ねようと思っているうちに、いつのまにか中途半端にして身を終えてしまうでしょう。

水..

苦を忘れて功を立て名を残すというときは、志多く功名にある事にして、真の道理に非（あら）ず。董子（とうし）の語能（よ）く能く御詳思（し）ようし）あるべし。一際会（さいかい）で放過せず、一事（いちじ）を成すべし。後の好会（こうかい）を待つときは、半途にして終る説は、いかさま古今同一轍にして人我共に其時を失わざるを勉めて、いたずらに後を期すべからずの箴規（しんき）に候。

（訳）

今の苦勞を忘れて、手柄を立て名を残そうというのは、それは名を残そうという気持ちがある功利的な考えであり、真の道理ではありません。漢の武帝の名臣で有名な儒学者である董仲舒（とうちゅうじよ）の言葉（「其れ仁人は其の誼（ぎ）を正して其の利を謀（はか）らず。其の道を明らかにして其の功を計らず」）をよくよくご熟慮なさるべきです。何事もその場限りにやりつ放しにしないで、じっくりと一つの事を成し遂げるべきです。また、次の好い機会がくるのを待っているうちに、中途半端にしてその生涯を終えるという説は、いかにも昔も今も同じで、人の犯しやすい誤りで、自分もその時の機会を逃さないように努力して、無駄に後の機会などがあるという空しい期待を抱いてはいけないという戒めであります。

（箴規…箴（しん））針であり、戒め規範）

（コメント）

董仲舒のことは..

「正其誼不謀其利、明其道不計其功」（其の誼（ぎ）を正して其の利を謀らず、其の道を明らかにして其の功を計らず）

功利のためではなく、それ自体が人として求めるべきあり方である

人は利を謀ったり、功を計ったりして生活することとは、人間としてはごく普通のことであり、否定すべきことではない。ただ、人の道としての重点に置くのは「義（ぎ）」と「道」にあると言っているようです。

水雲問答（55） 一時の愉快を一世に残さん

雲..

古今を考（かんが）へ候に、凡（およそ）功をなし得るまでは苦みて、功すでに成て樂に赴（おもむ）きと為（す）る時、諸事背違して心に任せぬことのみ多きやに存候。謝安の桓温（くわんをん）があるとき全からざるを憂（うれ）へ、符秦（ふしん）の大兵を退る迄は其心中深察すべし。大難既にやみ、功成、名遂（とげ）て、瑯琊（ろうや）の讒（ざん）始て行はる。裴度（はいたく）が淮西（わいせい）を平（たい）ひらげ）て後、憲宗の眷（けん）衰へたるも同じことに候。故に大丈夫直に進む一大好事を鋭く做得べし。とても前後始終を量ては、何事も出来申（もうす）間鋪（まじく）候。一時の愉快を一世に残さんこと、これ予が志なり。如何如何。

（訳）

古今のことを考えますに、およそ功績（手柄）

を立てるまではいろいろ苦しみますが、功をすでに立て、これから楽になるうとするときに、(いろいろと問題が起こり) 心に任せぬことばかりが多いようです。東晋(とうしん)の名宰相(めいさいしよう)と言われた謝安(しゃあん)でさえ、君子の位への野心を持っていた桓温(こうおん)が武威をほしいままにした時は、これを憂い、また(前秦王)符秦(ふしん)が大軍で攻めてきたのを撃退するまでは、さぞや心安からぬ心中を深く察されるのです。しかし、これらの国の大難が去り、功成り名遂げたとき、こんどは瑯琊(ろうや)による嫉妬から(武帝への)讒言(かんげん)・いつわりの情報を報告する)が行われました。また、裴度(はいたく)・唐の大官)が淮西(わいせい)の内乱を平定してのちに、憲宗皇帝からの愛顧が衰えたのも同じことです。それゆえ大丈夫たる者は、とにかく真つ直ぐに進み、よいと思うことは鋭く(迅速に) やってしまふのがよろしい。ぐずぐずと前後のことを考えて始終心配してばかりいては何事も成し遂げることはできません。

ここだと思ふ好機にみごとにやってのければ、男子の本懐(ほんくわい)というものです。「一時の愉快を一世に残さん男は一本勝負だ」私はこう考えるのですが、いかがでしょうか。

(コメント)

謝安(しゃあん): 320 - 385年、名族に生まれて、大いに将来を期待されていたが、若い頃は出仕せずに悠々と暮らしていた。

40歳で初めて仕官し、桓温の司馬となったが、やがて桓温から離れて中央に戻った。当時、桓温の勢力は東晋を覆うほどに拡大し、桓温は篡奪(ぜ

んじよう)君子の位を譲り受ける)の野望を見せていた。しかし謝安は桓温の君子への野望に強く反対し、引き伸ばし工作を行った結果、老齢の桓温は亡くなり、東晋の命脈は保たれた。また、前秦の符堅(ふけん)が攻めてきたときに、これを迎え撃つて大敗させた(淝水(ひすい)の戦い)などで東晋の危機を幾度となく救った人物。

水..

男子と生るる者、誰か此願なかる可(べ)き。然ども其位と時とを得ざれば、袖手(しうしゆ)して空(むなし)く一生を過す耳(の)みに候。閣下、閥閥、世家、時至れば謝、裴が業を成し得べし。凡そ人、青年は志鋭にして、中年に至りて摧挫(さいざ)し易く候。今より後、此条を念々忘れ給ふべからず。

(訳)

男子に生まれた者として、この願いを持たぬ者がありましようか。しかしながら、地位と時世に恵まれなければ、手をこまねいて空しく一生を過すばかりです。幸いにして閣下は名門のご出身であります。時世がめぐって来れば謝安のような大業をも成し遂げられましよう。ただ若いうちは理想は盛んであっても、中年になると挫折しがちであります。今日以後、このことをしっかりと忘れになつてはいけません。

水雲問答(56) 胆は大ならんを、心は小ならんを欲す

雲..

人は懼(ぐ) 心を持つること、尤(もつとも)害を避(さくる)の一術なり。懼(ぐ) 心とは、朝夕惴々(ずゐずゐ)として恐るるに非ず。我力小く、任重きを知て、万世に垂(たれ)て恥をのこさぬ工夫第一の候。

(訳)

人が懼心(ぐしん)・恐れる(ころ)を持つのは、被害を受けないようにする一つの術です。懼心(ぐしん)は一日中びくびくとして恐れると云うことではありません。私は、力は小さくても任は重いを知っており、これから続く世の中に恥を残さない工夫をすることを第一としています。

水..

孫思邈(そんしぱく)が、心は小ならんを欲するの語、乃(すなわち)是也。しかし後、ことに臨て大胆なるを真丈夫と申すべし。

(訳)

孫思邈(そんしぱく)・中国唐代の有名な医者・道士)の「心は小ならんを欲する」という言葉はとても良い言葉です。ことを行ふ時は大胆にやることが大切な心意気です。

(コメント)

「胆(たん)は大ならんことを欲し、心は小ならんことを欲す」(旧唐書)孫思邈伝より)

・・・人は、度胸(胆)は大きく、注意(心)は細かでありたいものである

「ふるさと風の会 文庫展」 &

「風のことは絵同好会展」

日時:令和7年10月17日(金)~22日(水)

10:00～18:30（最終日は15時まで）（入場無料）

場所:石岡市・まちかど情報センター(国府3-1-16)

ふるさと風の文庫

風のことは絵

会報「ふるさと風」に掲載してきたものを、文庫本に編集し、石岡市まちかど情報センター他で販売しております。お問い合わせは編集事務局へ。



風の会文庫を会場で展示販売しております。
皆様のお越しをお待ちいたしております。
(問合せ先：080-3381-0297 木村)



ふるさと風の会・風のことは絵同好会

お待ちしております。